



消化器画像診断アトラス

監修 下瀬川 徹

編集 小池 智幸, 遠藤 克哉, 井上 淳, 正宗 淳

自治医科大学

菅野 健太郎

私自身のことで恐縮であるが消化器内科を志す大きな動機となったのは、患者さんが多いこととともに、2重造影法や内視鏡によって自ら手で診断できるということにあった。現在では、CTやMRIなどの画像診断は主に放射線科が担っているが、内視鏡をはじめとする画像診断の魅力が消化器内科を志す大きな磁力として働いていることは間違いないであろう。現在、内視鏡や超音波は単に診断ではなく治療にも拡大し、わが国の消化器内科医の技能は名実ともに世界をリードしているといっても過言ではない。

このたび下瀬川徹教授監修のもとに東北大学諸氏の総力を結集してまとめられた消化器画像診断アトラスは、美しい画像が豊富であることは無論、各疾患に対し疾患の概要、典型的な画像所見とその成り立ち、確定診断へのプロセス、治療について簡潔かつ要を得た記述と必要最小限の文献が記載されており、これまでに例のない、まさに圧巻の絢爛たる画像アトラスである。

下瀬川教授は大学では副学長、医学部長、病院長という要職を歴任される一方、日本消化器病学会理事長として学会を指導されてこられたのであるが、東北大学第三内科学教室からの伝統を受け継ぎ、個々の症例を大切に、その基本情報としての画像診断の水準を高める不断努力を積み重ねられてきたことが紙背の随所に窺うことができ、改めて深く敬意を表したい。画像アトラスという表題でありながら、本書の内容が画像の羅列にとどまらず奥行きや深さが感じられるのは、大切に蓄えられてきた個々の症例の画像から優れた物語が紡ぎだされているからではないだろうか。すなわち本書の画像アトラスは、単に美しい画像を収集しているのではなく、その疾患がどのように成り立ち、それが形態変化としてどのように表現されるのかについて各執筆者が真剣に向き合ってきた姿を彷彿させられ、画像を提供していただいた患者さんの生活史や担当医との対話などにも読者の想像を誘うのである。もちろん、東北大学消化器内科では、形態変化の背後にある分子レベルの異常にも踏み込んだ優れた研究を行っているが、本書ではその詳細についてはきわめて限定的な記述にとどまっており、これは本書の焦点を絞るための抑制的な配慮と思われる。

本書はわが国の消化器画像診断の到達点を示すマイルストーンとして、初学者から熟達者まで幅広い読者に自信を持って勧められるアトラスであるが、できれば英文出版して世界にも発信していただきたいと願うのは高望みであろうか。

●中山書店 刊 A4 頁552 2017年8月
定価：本体25,000円＋税
ISBN 978-4-521-74544-2